



▲会場となったドリームスタジアム太田。ボックスはパーテーションで仕切られ、選手はマスク着用で投球と、コロナの影響がまだ色濃く感じられた

昨年3月の全日本ナショナルチーム・ユースナショナルチームの選考会では、総勢52名のメンバーが選抜されたが、1年間の各大会の成績によるポイントや、課されていた課題の達成度などをもとに、その52名からナショナルチーム男子6名、女子7名、ユースは男女各8名の計29名に絞り込まれた。その新生ナショナルチームは、4月24日から5日間、群馬県太田市のドリームスタジアム太田で強化合宿を行ったが、合宿2日目に取材におじゃました。

昨年からナショナルチームに在籍したままプロライセンスの取得が可能となった。今年も男子は徳久恵大選手、井口遼太選手、ユースの河内唯斗選手の3名、女子も今井双葉選手がプロ



テストを受験したが、2次テストの日程(1日目・26日、2日目・27日)と重なったため、合宿にはその4名を除く25名が参加した。

下地賀寿守監督が掲げる今回の合宿のテーマは「感性を磨く」だそうで、毎日異なるオイルパターンのレーンで、選手はどのパターンかは知らされないまま、自分で感じ取りながら投球ラインを見つける練習がメインに組まれていた。

「あらかじめ発表されたオイルパターンを練習してきたけど、実際に投げると違って、という声をよく耳にします。メジャーリーグなどを見ていると、今はいろんなデータが数値化されて表現される時代だけど、あたかもそれが答えのごとく勘違いしがちです。データをうのみにするのではなく、自分の感性を信じて、自分なりの投球ラインを見つける訓練をしようというのが狙いです」(下地監督)

◀コーチとしての役割も大きい佐々木キャプテン。下地監督は「女子の佐藤悠里キャプテンとともに、将来的にもナショナルチームに関わってほしい人材」と信頼は厚い

JBC 全日本ナショナルチームメンバー強化合宿

4月24～28日 / ドリームスタジアム太田

総勢29名にスリム化して 新生ナショナルチームが始動

ミーティングルームで昼食を取ったあとは、北川薫JBC会長の依頼で訪れた大澤清二・大妻女子大学名誉教授の「投球精度を上げるためには…」と、専門の統計学の話を変えながらの講義に耳を傾けていた。

午後からは、リメンテを行ったレーンで、スコアをつけながら6Gの投球を行った。



▲選手は毎日変わるオイルコンディションの攻略に取り組んだ

佐々木智之プレイング コーチキャプテン談

男子のメンバーはかなり若返りました。私がナショナルチームに入って今年で20年目になります。その20年前は皆無だった両手投げが増えてきたり、強いボールを投げるメンバーが近年は多くなりました。それにとまって、レーンの攻略の仕方も変わってきている部分があります。これまで自分が体験してきたことと、今の時代に沿ったものをうまく融合させながら、若いメンバーと一緒にやっていきたいと思います。

そのときのコロナの状況にもよりますが、今年は8月にアジアジュニア、11月にアジア選手権があります。メンバー個々はみんなある程度スキルが高いので、この合宿では、じゃあチームとして戦うときに、自分の役割はどういうものなのかなどを考える上で、非常に重要な機会だと思います。



▲合宿は、下地監督の直接指導を受けられる貴重な機会でもある



▲ユースメンバーも垣根なく溶け込んでいた



▲昼食はお弁当でした



▲特別講師の大澤清二さんが講義を行った



▲講義風景

下地賀寿守・ナショナルチーム監督に聞く

プロ、アマ関係なくチームジャパンで世界のなかで日本の存在感を高めたい

——2021年のメンバーから、かなり人数が絞られました。

国際大会に2年ほど派遣できていないという状況のなか、選手のモチベーションを維持する難しさがありました。そういうなかでこの1年は、どれだけ志を高く持っているかが問われた期間でもあります。1年間の大会の成績をポイント化するとともに、フィジカルトレーニングやオイルパターンの検証など、与えられた課題をクリアしたメンバーを残しました。

——コロナで丸2年、ほぼ活動は休止状態でした。その影響は大きいですか。

選手は目標設定ができないなかでの選手生活で、非常に苦

しい2年間だったと思います。われわれも、国際情勢をまったく把握できていないので、果たして今の日本のレベルが、世界の中でどの位置にいるのか確認もできていません。ただ今年度のメンバーは、かなりレベルが高いと思っています。とくにユースで、女子は石田万音、近藤真桜、濱崎りあらの(高校)新2年生組、男子では5人が入った新3年生組を、私は勝手にボウリング界の黄金世代といっているんですが、素晴らしい素材がそろっています。

——今年は国際大会への参加を予定されていますか。

ユース世代は8月にタイのバンコクで、アジアジュニアチャ



ンピオンシップ、大人世代は11月に香港でアジア選手権への参加を予定しています。その代表メンバーは、5月のNHK杯全日本選抜の一発勝負で選びます。

——昨年、ナショナルチームに在籍したままプロテスト受験の道が開かれました。

歓迎すべきことですが、安里秀策が今回ナショナルから外れたように、センター勤務をしながら、プロ活動にナショナルチームもとなると、実際問題どう折り合いをつけていくのが難しい。今年のプロテストには現メンバーが4人受験しま

すが、それは志があって大歓迎なんです。ただなったあとの自分の活動の環境整備がどうなるかが心配ですね。

——逆にプロボウラーがナショナルチームに入る可能性というのはどうですか。

来年また選考会を予定していますが、プロの皆さんの中から受ける人が出てくれればうれしいですね。JBCの会員登録が前提ですが、今のところとくにハードルは設けていません。プロとかアマとか関係なく、チームジャパンとして世界で闘う意志のあるメンバーでチーム編成をして、世界のなかで日本のポジションがどんどん上がっていくのであれば、業界全体にとってもいいことじゃないかと思っています。ただプロボウラーの中に、その志を持ってくれる人が何人いるのかは疑問です。ナショナルを卒業してプロで活躍している川添愛太や藤井信人

がもう一度世界選手権やアジア大会で闘いたいという気持ちになる可能性はあると思いますが、まったくナショナルを経験していない人が興味を持つかというと、難しいかもしれないですね。結果を残しても賞金があるわけでもないですから。

——そういう意味では、ナショナルチームメンバーも、置かれた環境は恵まれていないですね。

高校から大学進学、就職というときに、ボウリングを断念しなくてもいい環境を作ってあげたい。ジュニアで頑張ってきた子たちが進学するときに、大学が門戸を開いてほしいし、大学を卒業したあとには、企業で優秀な選手をサポートしていただきたいですね。そのためには、例えば今年のアジアジュニアでたくさんのメダルを持って帰ることも、アピールのひとつになるのかなと思います。